# 依存症者が地域に定着しながら治療を継続していくためのサービス充実

事業実施者	特定非営利活動法人 群馬ダルク
助成申請年度	2018(平成30)年度~2020(令和2)年度
事業実施年度	2019(令和 元)年度~2021(令和3)年度

#### はじめに

日本の依存症患者数は10万人以上、潜在数はその数十倍、推定500万人以上いるといわれています。 適切な支援が少なく、治療を受けられないまま精神病院・刑務所の往復を繰り返し、家族や周囲の人々を 巻き込みながら、依存症の悪循環を回り続けるのが現状です。

群馬ダルクは薬物・アルコール依存症入所型回復支援施設です。古い日本家屋を2棟借り、2006年6月に開設、2007年2月に NPO 法人となり、定員25名ほどの施設で、集団生活を通し依存症からの回復に向けて生活しています。

しかし、「入所型」に対して当事者の心理的ハードルが高いためか、依存症の悪循環を回り続けて症状が 進行し、相当重症になってからダルクにつながるケースが後を絶ちません。

依存症が相当重症化し、本人と家族が地域から孤立してしまう前に、地域とつながっていられる段階での「早期発見・早期治療」ができるしくみが必要と考え、この3ヵ年事業に取り組みました。

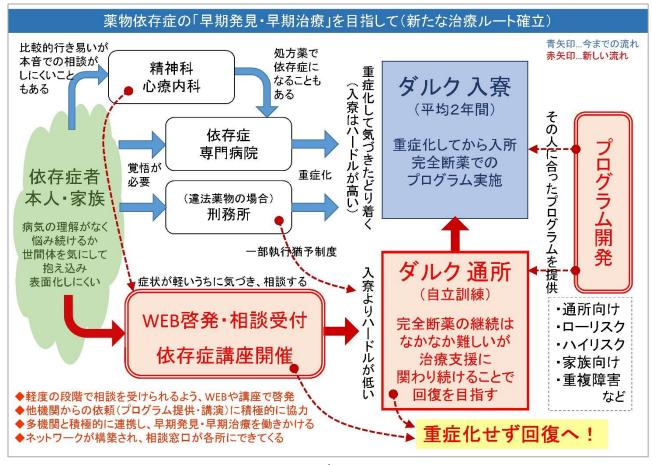
#### 取組の概要

#### Ⅰ 通所施設開設をきっかけとして支援の幅を広げる

- ・通所のみの利用者、女性利用者の受入
- ・ローリスク、ハイリスク、重複障害者、家族など 個々人の状況にあったプログラムの開発と提供

#### 2 重症化する前に気づき、相談できるしくみをつくる

- ・WEB での啓発、電話やメールでの相談受付
- ・「依存症講座」の定期開催
- ・他機関への講師派遣、回復支援プログラム提供
- ・早期発見・適時対応のための多機関連携推進



#### 取組の詳細

### Ⅰ 通所施設開設をきっかけとして支援の幅を広げる

通所のみ利用者の受入(3年間) (利用者 開始時0名→合計12名) 通所のみ利用する人へ、帰宅後もメッセンジャーなどでフォローするなど、"孤独"を感じさせないよう工夫しています。 また、女性の利用希望も確実にあることがわかりました。

ローリスク、ハイリスク、重複障害者、家族など個々人の状況に合ったプログラムの開発と提供(3年間)

(支援プログラム数 約30個→約70個)

◎軽度段階(ローリスク)向け通所・精神病院・矯正施設などの薬物事犯者(初犯・少年)

◎中重度段階(ハイリスク)向け

長期入所・併存性障害(重複障害)・矯正施設向け(累犯)

◎共依存症向け(家族会でのプログラム開発と試行)

### 【通所のみの利用者の支援】

- ・通所のみの利用者は、1年目は2名、2年目は4名、3年目は6名と、確実に増えました。
  - (うち女性は、1年目は1名、2年目は2名、3年目は2名)
  - (うち LGBTQ の人は、1年目は1名、2年目は0名、3年目は1名)
- ・依存症が再発して音信不通になる利用者もいましたが、社会復帰した人もいて、就労しながら群馬ダルク で夕食を共にし、プログラムに参加することでクリーン(薬物などを使わない)状態を維持できています。
- ·その人に合った支援ができれば、通所のみの利用であっても社会復帰が見込めます。(容易ではない)
- ・通所している時間帯以外のフォロー(例えばメッセンジャーでのやりとりなど)も大切です。
- ・「通所利用」という枠組みでダルクにつながり、治療への心理的ハードルが下がった結果として、重症化 する前にダルクの入所プログラムに進んだ人もいました。

### 【個々人の状況に合ったプログラム開発】

- ・新たに開発したプログラムは、1年目は5個、2年目は10個、3年目は25個にもなります。
- ・新型コロナウイルス感染症の流行の影響で、欧米の先進プログラムを学びに行くことはできませんでしたが、以前学んだものをもとに翻訳・開発して、群馬ダルクで試行して改善していきました。
- ・家族向けのプログラムは、群馬ダルク家族会・茨城ダルク家族会でそれぞれ月 | 回継続試行しています。
- ・また、併存性障害(重複障害)への支援を強化するために、「Team D-DRoPs」(※)に参加し、併存性障害リカバリーワークブックの作成と実践を行っています。(2020年9月~)
- ・高崎健康福祉大学の池田朋広准教授の研究にも協力し、併存性障害を抱える依存症者向けプログラム 開発に取り組んでいます。(2020年11月~)

※Team D-DRoPs … 司法・医療・教育・研究などの従事者及びダルクなどのピアスタッフで構成し、併存性障害支援の新たなガイドライン策定に向けて検討協議している。



池田朋広准教授によるプログラム開発



群馬ダルク家族会でのプログラム開発

2 重症化する前に気づき、相談できるしくみをつくる		
WEB での啓発、電話やメールでの相談受付	◎HP からの相談件数…  年目40件、2年目60件、3年目70件	
	相談者は家族、友人、弁護士、病院、雇用主、福祉、市役所など	
	◎SNS フォロワー数 (   年目   04人、2年目236人、3年目528人)	
「依存症講座」の定期開催	依存症の理解促進と多機関連携を図るために、年3回開催※コロナ禍中止有	
	のべ参加者数…  年目  2人、2年目5 人、3年目 69人	
	この講座開催をきっかけに、新たに42の機関の人とつながることができた	
	◎矯正施設や病院などヘプログラム提供(6カ所へ年間Ⅰ30回以上)	
他機関への講師派遣 回復支援プログラム提供	この3年間で2施設増え、プログラム提供枠が1施設増えました。	
	◎各地ダルクや家族会へのプログラム提供(34カ所へ年間60回以上)	
	この3年間で18カ所増え、プログラム提供枠が11施設増えました。	
早期発見·適時対応のための 多機関連携推進	上記の取り組みでつながった方々との連携を深めるために、「地域連携	
	ネットワーク構築会議」を2022(令和4)年3月に <u>はじめて開催</u> しました。	
	参加機関I5カ所、参加人数28名。	

### 【WEB での啓発、電話やメールでの相談受付】

- ・WEB サイト(ホームページ)を令和元年7月にリニューアルし、ページ訪問数や、Google アナリティクスを活用した分析などにより、情報伝達の確実性や掲載内容の分かりやすさなどについて検討を重ねました。
- ・リニューアル以降、ホームページ閲覧者からの相談が増加(以前は数件→令和3年度約70件)
- ・相談内容も、以前はさまざまな支援を受けてもなお回復できない重度な方の相談が多かったが、現在は 早期に依存症だと気づいた家族などからの相談も増えています。

### 【「依存症講座」の定期開催】

- ・毎回テーマを決め、講師を招いて講座を開催。
- ・回を重ねるごとに参加機関が増えていきました。 オンライン開催にしたことで、多様な分野・機関の 人が参加しやすくなったと思われます。
- ・この3年間で、各地の保健所・障害福祉課・精神保健福祉センター・保護観察所・刑務所・病院・ 家族会・自助グループなど、新たに42の機関の人 とつながることができました。
- ・助成金終了後も、この講座は継続していく予定。
- ・このつながりを、後述「地域連携ネットワーク構築 会議」に活かしたいと考えています。

開催時期	依存症講座の内容(主なテーマ)
R1年7月	家族の立場からみた依存症
R1年9月	刑務所処遇カウンセラーと障害者支援施設の立場から
R1年11月	依存症と重複障害
R2年2月	ダルクと障害福祉サービス
R3年3月	コロナ禍での依存症者の回復
R3 年10月	刑務所の教育専門官からみた依存症
R3 年11月	茨城県における依存症関連機関との連携
R4 年2月	併存性障害(重複障害)者の回復について
R4年7月	依存症と法律の問題

#### 【他機関への講師派遣、回復支援プログラム提供】

- ・開発したプログラムを他のダルク、家族会で試行しています。 北は青森県から南は沖縄県まで、約34カ所のダルクや家族会 へ出向き、又はオンラインで、プログラムを提供しています。
- ・保護観察所や刑務所など、4カ所に年80回以上、精神病院 2カ所に年50回以上、プログラムを提供しています。この3年間 で2カ所増え、プログラム提供枠が1カ所、月1回増えました。
- ・プログラムの内容も、対象者の状況や要望によって提供できる 種類が増え、適切な回復支援を促せるようになってきています。



鳥取ダルクにて TC プログラム提供

### 【早期発見・適時対応のための多機関連携推進】

- ・3年間の助成事業の集大成のひとつとして、今までつながることのできた多様な分野・機関の方々とのフラットな関係性で築く「地域連携ネットワーク構築会議」を、2022(令和4)年3月に開催しました。
- ・参加機関15カ所、28名の参加があり、県、保護観察所、刑務所、病院、家族会など依存症支援に関係の深い機関だけでなく、地域包括支援センターなど地域福祉分野からも参加があり、今後のネットワークの広がりが期待されます。各機関で依存症問題の対応に困ることが多々あることも知ることができ、お互いに協力関係を築き、早期発見・早期治療の実現を目指すはじめの一歩となりました。
- ・会議参加者の事後アンケートの満足度も高く、また「何かあった時に相談できる連携体制」や「協力体制」 に期待する意見もありました。今後も定期的にこのような場を設けていきます。(次回は R5年2月予定)

### 3年間を振り返って

助成期間の3年間のうち、2年間は新型コロナウイルス感染症流行の影響で、思うように事業を展開できませんでした。特に、依存症回復支援の先進国でもあるアメリカやカナダに支援プログラムを学びに行けなかったことが、一番の"心残り"となりました。

今、群馬ダルクの大きな課題としては「併存性障害(重複障害)者への支援」、「支援の長期化と重症化」 があります。特に、知的障害や精神障害(主に統合失調症・発達障害)などが回復に向かうプロセスでの 大きなハードルとなってしまうケースが増えていて、支援事例が国内に少ないため苦慮しています。

社会復帰後の大きな課題としては「支援プログラムの輪とのつながりの維持、再発予防」、「家族との関係 再構築」があります。家族・友人・仕事などで健康的な人間関係を築き、維持しながら、長期間薬物などを 止め続けていくためには支援プログラムの輪とのつながりが必須になります。社会復帰後の再発パターン で非常に多い事例は、「自分は治った」、「〇年、薬を断てたからもう大丈夫だろう」と安心しきってしまい、 支援プログラムの輪とのつながりを断ったことで依存症の症状がひどかった時の思考パターンに徐々に 戻り、再発するパターンです。社会復帰後のアフターケアプログラムの充実が重要です。

研修を計画していたカナダの施設では、ダルクと同じように「依存症当事者による支援」が行われており、 また上記課題にあげたような事例に対する支援経験も豊富です。そうした先進的な取り組みを具体的に 学び、日本の環境に合う形にアレンジした支援プログラムを作ることを、今後目指したいと考えています。

一方で、新型コロナウイルス感染症流行の影響のプラス面として、さまざまな事業の「オンライン化」が 急速に進みました。

「依存症講座」は、オンラインに切り替えたことで参加へのハードルが下がり、参加者が想定以上に増えたと思います。その結果として、「地域連携ネットワーク構築会議」を一民間団体として主催できたということは、大きな成果だと思います。

また、今回の取り組みで一番の成果は、「通所者の支援」にチャレンジできたことです。

依存症の回復のためには、昼も夜も薬を断ち、クリーンな日を I日I日積み重ねていくことが必要です。

そのため、通所事業だけ(昼間だけ)の支援では回復は困難だといわれています。

通所治療の初期段階では、I人の時間を作りすぎると再発の確率がかなり高くなりますので、土曜日、祝日も通所事業所を開所し、仲間たちとのつながりを保ち続ける工夫をしています。



土曜日、祝日は運動プログラムを実施

この3年間で入所せずに通所事業のみで社会復帰できた人もいて、困難ながらも不可能ではなく、支援プログラムの有効性を再確認することができました。

そして、通所事業のみの支援が可能となったことで、男性だけではなく、女性・LGBTQなどの多様な依存症者の受入もできるようになりました。群馬県内では女性・LGBTQの方々を支援する居場所がほとんどないため、多様なケースの入所希望者へ今後も貢献できるのではないかと考えています。



日中プログラム風景(参加者25名)

この助成で、依存症者が地域に定着しながら治療を継続していくための基盤を調えることができました。 3年間の助成事業で築いてきた基盤を今後も維持、発展させていきます。これからが支援の本番です。 今後ともみなさまのご理解とご支援を、どうぞよろしくお願いいたします。

2022(令和4)年8月

## NPO 法人群馬ダルク

〒370-0002 群馬県高崎市日高町144番地 施設長 福島ショーン TEL/FAX 027-363-3308 Mail info@gunmadarc.jp

Homepage https://gunmadarc.jp

Facebook https://www.facebook.com/gunmadarc/

## トゥデイ 多機能型事業所

〒371-0822 群馬県前橋市下新田町588 施設長 平山晶一 TEL 027-289-0702 FAX 027-289-0703

Mail mail@gunma-today.jp

Homepage https://gunma-today.jp/